

作成者：佐々木めい
作成日：2026年3月9日

ご挨拶

こちらは段々と春の陽気が感じられるようになり、日によっては平均気温が5度ほどになる日も増えてきました。少し前までは手放せなかったダウンジャケットの出番も減り、0度を超えるだけで「今日は暖かいな」と感じる自分の感覚に、北国の冬を越した実感が湧いています。

日本でも「春一番」の頼りが届いたようですが、こちらでも3月8日からサマータイムが始まり、日本とも時差が13時間に縮まりました。刻一刻と近づく留學生活の節目を意識しながら、一日一日をおろそかにせず、確かな目標を胸に最後まで駆け抜けたと思います。

友人の誕生日パーティー

同じく日本から留學に来ている友人が20歳の誕生日を迎えたので、そのお祝いをみんなで行いました。場所はJapanese houseという日本人達がイベント事を行う際に自由に借りることができるハウスが1つあるので、そちらで行いました。節分の日に行いみんなで恵方巻を作って今年の方角を向きながら食べ、アメリカにいなながらも日本の文化を感じながらこの日は過ごすことができ、懐かしいような気分になりながら恵方巻を食べました。友人は歌手のテイラー・スウィフトさんの大ファンなので、プレゼントとしてそのグッズをあげたり、マフィンを作る20個ほど焼いていってみんなで食べました。

私事ですが、先月からマフィン作りに熱中しており、コロナ禍以来のお菓子作りブームが再来しています。キッチンにはある程度お菓子作りができる様に初期に学校から借りているキッチングッズがあるので、そちらを活用しています。生活用品以上のものも貸し出して頂けるので、ぜひ皆さんもハウスに入居する際にはBuffet Centreという場所に行く事をおすすめします。



スケート体験

もう一人の県の奨学生の伊藤さんや現地で仲良くなった子達と一緒にスケートをしに行きました。福井県の敦賀市にも同じスケート体験施設がありますが、これまでに私は数回しかチャレンジしたことがなかったので上手に滑ることができる子に2時間ほど教えてもらい、ようやく手を放してゆっくり滑ることができる様になりました。友人から聞いた話ですが、フィンドレーでは比較的の若いころからスケートに触れる機会が豊富だそうです。平地で山がないので福井のようにスキーができる機会がない分、皆さんスケートをすると聞きました。そのためか、皆さん小さな子でも上手に滑ることができていてカッコいいなと思いました。



ルームメイト家族とのミニトリップ

ルームメイトはペンシルベニア州のピッツバーグ出身なのですが、週末にかけてルームメイトのご家族がフィンドレーまで訪れに来る予定とのことで、一緒にお出かけに行きました。一週間後にルームメイトと一緒にいる合唱団のヨーロッパツアーがあるので、そのための買い出しに行くついでにショッピングモールに立ち寄りしました。日本でいう滋賀県の竜王アウトレットモールのようなものに近くて、そこでみんなで様々な思い出話をしながらランチを食べ、コーヒー片手にショッピングを楽しみました。その後は世界三大悲劇のひとつともされている「嵐が丘」(Wuthering Heights)の実写版映画を見に行きました。この原作となった作品はサマセット・モームが選んだ世界の十大小説にも選ばれており、ノミネートされている作品のうち唯一のアメリカ文学になります。知識だけでしってはいたものの原作を読んだことがなかったので、今回映画を見て改めて原作を英語で読んでみたいと思う気持ちが増しました。映画が終わった後は小腹が空いたので、ワッフルハウスに行きました。こちらにも私には初体験で、夜行くと治安が悪いと噂のワッフルハウスに深夜に行ったわけですが、幸いなことに、厨房にネズミがいたこと以外は特に変わった様子はありませんでした。

こうして1日のミニトリップを終えて感じた事は、やはり与えられた機会に対して拒否する事は、大きな機会損失に繋がる可能性があるという事です。日本に比べて、単なるお出かけが意図せず学術的な問いに繋がったりすることが圧倒的に多いと感じています。自分を取り囲む環境に、所謂自分にとって「普通」のものがない状態がどれだけ自分にとって刺激になっているのか、改めて実感することができた良い機会となりました。



ここまでの留学を通じて、心境の変化

これはこれまでのレポートには書いてこなかった章で、読者の皆様には唐突で大変恐縮ですが、改めてこの留学を通じての自分の内面の変化や学びなどを書き記そうと思います。

私は自分を「スタミナのない社交家」と考えていますが、これは一見矛盾する様に聞こえるかも知れません。しかし、未知の環境において「機会損失を恐れる野心」と「自己のキャパシティ」との間で揺れ動くことは、私にとって最大の懸念事項でした。周囲と同等に経験を積み、人間関係を構築しなければいけないという、誰に強制されるでもない無言の圧力は、日本で成人し精神的な安定を得てからは久しく忘れていた焦燥感に近いものでした。当初、こうした強迫観念に似た自意識に嫌悪感を抱きながら過ごしていましたが、いま振り返れば、その感情の正体は「居場所の密度の差」に起因していたのだと考えています。

日本での生活においては、大学や職場、家族、部活動、そして気心の知れた友人達と言った具合に、自己を規定する居場所が多層的に分散されていました。しかし、留学先ではその全てが学校という単一のコミュニティに集約されます。逃げ場のない環境で、ここで失敗すれば後がないという極度の緊張に晒される事は避けられないプロセスだったのかもしれない。

渡航から7ヶ月が経過した現在、飾らない自分を提示することで無理のない人間関係を築く自己開示の質を上げること、そして「何もしない」という停滞の状態をいかに能動的にコントロールし、自分のペースを維持するかという二点の重要性に気がついてからようやく自分のペースがつかめてきた様な気がしています。こうした内面の揺らぎを肯定し、環境に適応させる術を学んだことは、学業上の成果以上に、今後の人生における大きな収穫であったと確信しています。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu